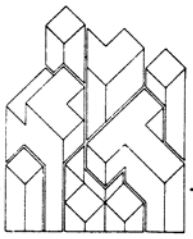
モノグラフ
中学生の世界
vol.15

© 1983. 株式会社 福武書店 教育研究所／加藤智禧・賀川雅子・遠藤純子
放送大学教授 深谷昌志

学業成績

～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか～



目次

特集● 入学試験考……2

調査レポート● 学業成績 ～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか～

調査を実施して……5

本報告書の要約と提言……6

第Ⅰ章 調査の目的

1．テーマ設定……7

2．調査対象……8

第Ⅱ章 学校生活の中での成績

1．充足感と成績……9

2．授業の理解度……16

第Ⅲ章 成績が上下したら

1．成績は自信を支える……21

2．成績を良くするには……24

第Ⅳ章 成績と未来像

1．どういう生活を送りそうか……31

2．成績階層と将来の生活……33

3．将来の家庭生活……36

まとめに代えて

1）成績モノカルチャー……43

2）加害者不在のミステリー……43

3）生徒に暖い目を……44

資料1 調査票見本……45

資料2 基礎集計表……55

特集

入学試験考

放送大学教授　深谷昌志

学校には入試がつきもの

見方によれば、中学教育の歪みの大半は、高校入試に起因するといっても過言ではない。中でも、偏差値による輪切りと呼ばれる受験のあり方に批判が集中している。

確かに、偏差値の変動に、生徒たちが一喜一憂するありさまは望ましいと思えないし、まして、偏差値の上下が、あたかも人格の上下でもあるかのようにみなす風潮は正常と言い難い。

しかし、偏差値を批判している内に、ともすると、学校が生徒たちを選抜する機構である点を攻撃し、試験のない社会が理想的であるかのような論調に流れやすい。

とは言え、古今東西を問わず、学校が常に選抜機能を備えているのは、教育史の示す通りである。つまり、アメリカならハーバード大学、ソビエトならモスクワ大学、フランスはソルボンヌ大学、さらに、イギリスはケンブリッジ大学やオックスフォード大学と、それぞれの国には、いわば最高峰ともいえる大学があり、そうした大学へ入学するのには、それなりの難しい試験を伴う。そして、当然のことながら、少数の勝者の陰に、多くの敗者が存在するという形になる。

入試競争というと、ともすれば、日本だけの現象、あるいは、日本の方が激烈と思いがちになる。しかし、入試の難しさや、入試のもたらす将来への明暗を考えれば、欧米と比べて、日本の入試は、むしろやさしいタイプに属する。

もっとも、入試のもたらす明暗が少ないからといって、試験へ至る過程がやさしいとい

うことにはならない。アメリカの場合、ハーバードやいわゆるアイビー・リーグ（東海岸の名門大学）とそうでない大学とでは、初任給はむろんのこと、社会的な評価も、決定的といえるほどに開きをもたらす。そうした傾向は、ヨーロッパやソビエト、そして、アジアについても共通に認められる。

それに反し、日本の場合、東大や京大、そして、早慶を卒業したからといって、初任給が変わることはないし、それらの大学を出たというレッテルも、比較教育的にとらえたり、歴史的に跡づけたりしてみると、むしろ、珍しいといえるほど、重みを持っていない。

学歴の効用が低下し、どの大学を出るかがそれほど問題でないのに、現象的にみると、過教育化が進み、偏差値による支配がまかり通る。そうした意味で、現代の入試に客観的な状況と現実の姿との間のアンバランスが目につく。

社会政策的な視野を

いずれにせよ、現代の学校は、私塾や寺子屋のあった時代と異なり、巨大な社会制度の一部となりつつある。つまり、公教育と呼ばれる制度が現代の学校であり、それだけに、社会政策的な視野を欠いたのでは、教育論としての説得力を持ち難くなる。

くり返しになるが、偏差値が望ましくないからといって、入試のない学校制度を夢みるのは、現実的な見通しを持たずに、蛮勇をふるうドンキホーテに似ている。

しかし、高校入試をめぐる論調を調べてみると、社会政策的な視野をふまえていない場合が多いのに気づく。社会政策的とは、あるひとつの改革を試みる時、そうした改革が、社会的に、どのような反応を引き起こすのかを計算し、そうした反応を見込んで、具体的な改革案を提示する態度を意味する。

社会政策的な視野を欠く具体例を挙げるなら、大学入試の際の共通一次試験が、そのモデルとなろう。デスクプランの段階では、一期校と二期校との差がなくなり、高校生たちは学力に応じて、それぞれの志望校を選べるはずであった。しかし、実施へ踏み切ってみると、まず、国公立大学を一校しか受けられないから、すべりどめや安全を考えて、私立校を受験する者が増える。それが私立校の倍率を高めるので、本来、私立へ入りたかった生徒は共通一次を放棄して私立だけの受験にきりかえる。その結果、有名私立大学の難しさが増し、頂点に引き上げられる形で、中堅どころの私立大学も、難関になり始める。そうした一方、国公立大学は、共通した尺度で測られるので、トップからラストまで、共通一次の得点によって序列づけられる。しかも、国公立大学受験生は、一次試験に加え、二次試験の準備も必要となるので、一層の負担を強いられるようになる。

このように見てくると、共通一次試験制の導入は、意図とは別に、私立大学の難関化と国公立大学の序列化を招いただけで、入試状況そのものの改善にほとんど役立たなかったように思える。しかも、そうした問題の多くは、実施前にある程度、予測できたもののように思われてならない。

入試にベストの方法はない

今まで触れてきたように、現在の高校入試がさまざまな歪みを伴っているのは確かだが、そうかと言って、入試のない学校制度は考えられない以上、少しでも、弊害を減らすため

に、どういう改革が望ましいか、社会政策的な視野をふまえて、現実的な方法を見い出す態度が必要であろう。

しかし、その際、どの方法をとったにせよ、入試にベストがないことを前提にするのが望ましい。

一例を挙げるなら、一回だけの選抜試験の弊害を除外するために、内申書や推せん制を提唱する人が多い。しかし、内申書が重視されると、生徒たちは、内申書にこだわりを見せ始める。そして、通常の学校生活の中に試験勉強の雰囲気がただよい、時としては、受験勉強の慢性化を招くことになりやすい。

また、推せん制も、人物評価が対象となるので、生徒たちの間に、先生の目を気にする風土が育ちやすい。

また、高校への進学率が94%に達した現在、高校全入運動も、入試の特効薬とはなり難い。なぜなら現在の入試は、どこでも良いのなら入るのは簡単だが、少しでも、良いといわれる高校へ入ろうとするための競争である。したがって、高校の定員を増加させたからといって、試験競争が冷却することはあるまい。

さらに言えば、仮に、高校全入が実現したとしても、大学入試が控えている以上、いわゆる良い大学へ入りやすい高校へ志望者が集中することは避けられまい。となると、大学全入運動へと、問題は進んでいく。しかし、生徒たちの中には、必ずしも、知的な学習に向いていないタイプも存在する。そうした生徒を、学校へ束縛するのは、不本意入学を助長するようなもので、本人の適性を生かした進路指導とはいえまい。

そうした状況は、学校群制度や総合選抜についても、あてはまる。どの学校へ入れるのかわからないと、努力すれば入れる学校ということから、私立高校へ受験生が殺到する。

さらに、小学区制は、選抜の自由がないという面で問題を残すし、高校の場合、すべてを小・中学校並みに均等化するのは、将来の人材養成という観点から疑問が生ずる。その上、ひとつの高校に、学力差の幅の広い生徒が収容されるので、学校間でなく、学校内での学力格差が強まり、授業が成り立ちにくくなる可能性も考えられる。

このように見てくると、入試を解決するための特効薬などは存在しないのに気づく。つまり、入試に、ベストの方法はなく、所詮、ある程度の弊害を伴うものの、その中で、より弊害の少ないものを探すという、いわばベターなものを選ぶのが方法のように思える。

日本に視野を限定しても、旧制中学校や旧制高校への入試をめぐって、内申書、推せん制、総合選択、学区制など、現在考えられている方策のすべてが、ある時期に、いずれも実施され、そして、効をあげることなく、手直しを迫られている。

したがって、入試の改善が、ベターなものを選ぶ政策だとするなら、ひとつの方法に固定せず、部分的な手直しをくり返す。そして、人間の心を無視するような机上のプランを避ける。さらに、できるかぎり、入試のあり方を多様化して、ひとつの型を作らないようにするなどが望ましかろう。

具体的には、高校サイドの自主性を認め、高校により、入試のスタイルを変えていく。それと同時に、高校側も、ユニークな選抜の仕方を考えるなどが望まれよう。

もちろん、そうした動きの背景に、人間の成長を長いスパーンでとらえ、入試は所詮、長い人生の中の通過点と思うような見方を拡めていくことも重要となろう。

長い人生の間に競争があっても良い。しかし、現在の競争は、あまりに過度で、そして、競争にとらわれすぎている印象を受ける。それだけに、よりベターな方法探しに、県や市ごとにもう少し個性を出して、試行錯誤で良いから、実行へ踏み切ってほしい気がする。

調査レポート 学業成績

～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか～

放送大学教授 深谷昌志

調査を実施して

中学生の通塾率は5割を超えていると言われる。全国の中学生の半数近くが、なんらかの補習教育を受けている姿は異様としかいいようがない。

良い成績をとることが、良い高校、そして、いわゆる一流大学へ通ずると、生徒たちは考えているのであろうが、そうした一方で、高学歴社会を迎え、学歴の値打ちは急速に下落しつつある。それにもかかわらず、生徒たちは、成績信仰にも近い感じで、良い成績をとることを目指している。学力をつけるために勉強をするのは、決して悪いことではない。しかし、あまりにも度が過ぎてはいないか。そうしたことを考えつつ、学業成績の良し悪しを生徒がどうとらえているのかを考えようとしたのが、本報告書である。

本報告書の要約

① 学校生活の楽しさ

上位層の60%は楽しいと答えているのに対して、中位層では42%、下位層では31%となる。（P.10図1・表1）

② 充足感

授業の時、自分らしさを発揮していると思える生徒は、上位層で69%、中位層33%、下位層16%である。（P.14図3・P.15表4）

③ 授業の理解度

授業が7割以上わかる生徒は、上位層で84～71%、中位層40～31%、下位層20～15%である。（P.17図4・P.18表5）

④ 成績が上下したら

成績が上がったら自信がわくし、下がったら自信がなくなる。（P.22図6・P.23表7）

⑤ 成績が良いのは

成績が良いのは努力するから、そして、成績が悪いのは怠けているからという見方が定着している。（P.25表9）

⑥ 勉強の得意な生徒のイメージ

勉強の得意な生徒は「ねばり強く頼りになる」、不振ぎみの生徒は「あきっぽく頼りにならない」というイメージが持たれている。（P.26図7・P.27表11）

⑦ 成績と進路

成績上位層の47%は、将来一流大学へ入学でき、専門的職業につけると思っているが、中位層の進学見通しは21%、下位層は17%となり、それと同時に、専門職への達成を断念する生徒の割合が増す。（P.35表18・表19）

⑧ 成績と未来像

成績が下位になるにつれて、未来の生活に暗いイメージを抱く生徒の割合が増加してくる。（P.38表23・P.39図9）

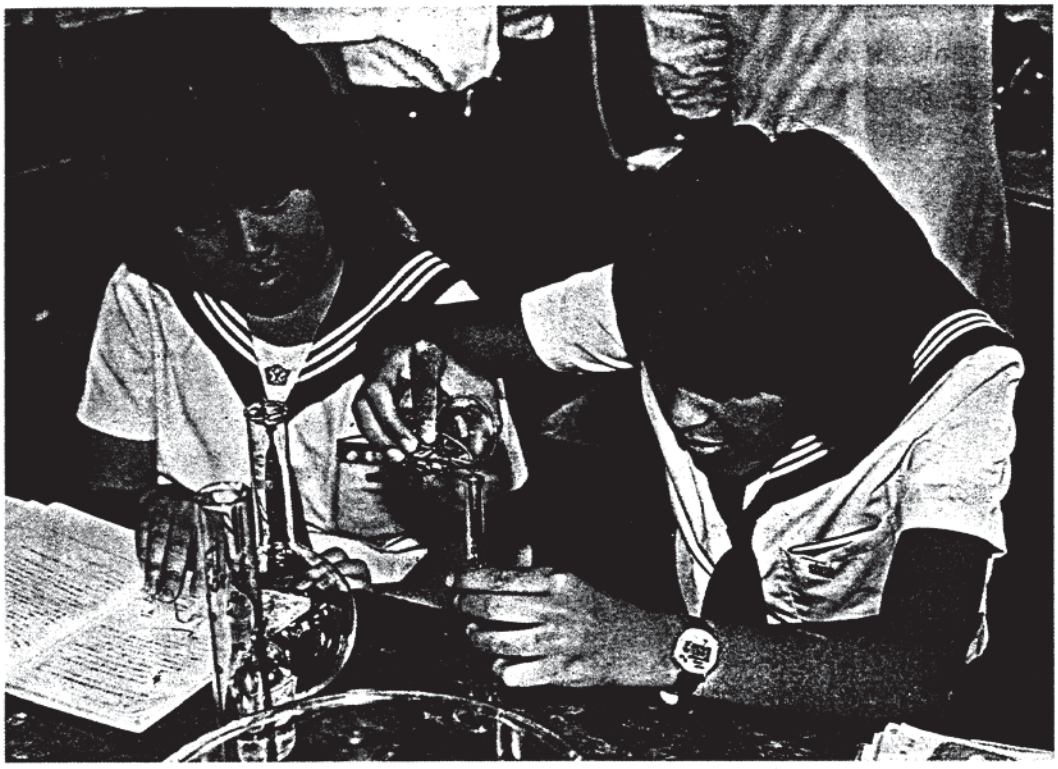
⑨ 成績と自己評価

成績が下位になるにつれて、自分をつまらない人間だと思うなど、自分に自信を持てない生徒が増加してくる。（P.41図10・P.42表26・図11）

提　言

成績の良し悪しは、生徒たちの意識を強く規定している。特に、生徒自身の自信に成績は関連している。それだけに、成績の良い生徒はともあれ、成績が下位になるにつれて、生徒たちは現在はむろん、未来についても暗いイメージを抱いている。学力格差がつくのは、ある程度やむをえないとしても、成績のふるわない生徒になんらかの自信を持たせることはできないのか。その方策を真剣に考えてほしいと思う。

第Ⅰ章 調査の目的



1．テーマ設定

荒れる中学生の姿は、現在では、社会問題化している印象を受ける。そして、ともすると、現象的に現れるショッキングな状態に目を奪われ、問題の本質を見失いがちになる。

本モノグラフ・シリーズでは、そうした立場から、「生活体験」や「部活動」などをとりあげ、いわば、中学教育に共通する問題を素材として分析を進めてきた。そうした中でも、学業成績をめぐる問題は、中学教育の当面している最も大きな問題のひとつであろう。

中学校ともなれば、学習内容に難しさが増し、学習内容を十分に獲得できない生徒も生まれてくる。もちろん、本人の努力や、教師の尽力により、学力をその生徒なりに十二分に獲得するのは可能であろう。しかし、そうした形で、可能性を十分に発揮したとしても、勉強に得意・不得意が生じるのはやむをえまい。

しかし、戦後の教育では、学力差をつけない教育、さらに言えば、落ちこぼれを作らない教育を掲げ、すべての生徒の可能性を認めてきた。その反面、理想を求めすぎ、現実的な学力差への対応に欠けるうらみが残る。つまり、学力差が生じ、勉強に苦手意識を抱く生徒が存在した場合、本来、勉強の苦手な者はいないのだからと、本人の努力に期待する

形をとる。確かに、学習努力によって、学力格差が縮小するのは事実であろう。しかし、そうした反面、勉強の得意な生徒が、さらに、学習努力を重ねたら、学力差はさらに拡大することもありうる。さらに言えば、残念ながら、学習の可能性の幅が、学習努力を超えているのも一面の真理である。

走るのが速い子と遅い子とがいるように、そして、絵のうまい子と苦手な子がいるように、英語や数学についても、得意な子と苦手な子とが存在する。それが、個人差なのであろうが、現在の学校では、そうした開きをおしかくし、本人の努力に解決の道を求めようとしている。そうした意味では、現代の学校は、学力差についての現実的な対応策を持っていないとも考えられる。

本モノグラフでは、そうした状況をふまえて、生徒たちが、学業成績について、どういう気持ちを抱いているのかという、いわば、学業成績観をとりあげることにした。つまり、生徒たちが学業成績の良し悪しの持つ意味を、どうとらえているのかを考えていくことにした。

2．調査対象

サンプル構成　(人)

地域＼学年	中 1	中 2	計
① 東京都豊島区立 A中	221	239	460
② 東京都北区立 B中	100	82	182
③ 仙台市立 C中	229	217	446
④ 名古屋市立 D中	409	—	409
⑤ 岡山市立 E中	318	311	629
計	1277	849	2126

本調査は、昭和58年3月に実施した。なおサンプルの抽出にあたり、高校入試を控えて微妙な心の動きを伴う時期だけに、3年生は調査対象から除外してある。

また、本テーマに関連するものとして、「モノグラフ・中学生の世界vol.5『学業不振とその背景』」を刊行しているので、本調査の結果を、前回と対比して検討をするのも、興味深いと考えられる。

調査票の構成は、巻末に付した通りだが、

①一般的に、成績の良し悪しについて、どんな意味を与えているか

②自分の成績の良し悪しと、自分の現状、そして、未来をどう関連づけているかを調査の中心にしている。

なお、以下の分析にあたって、

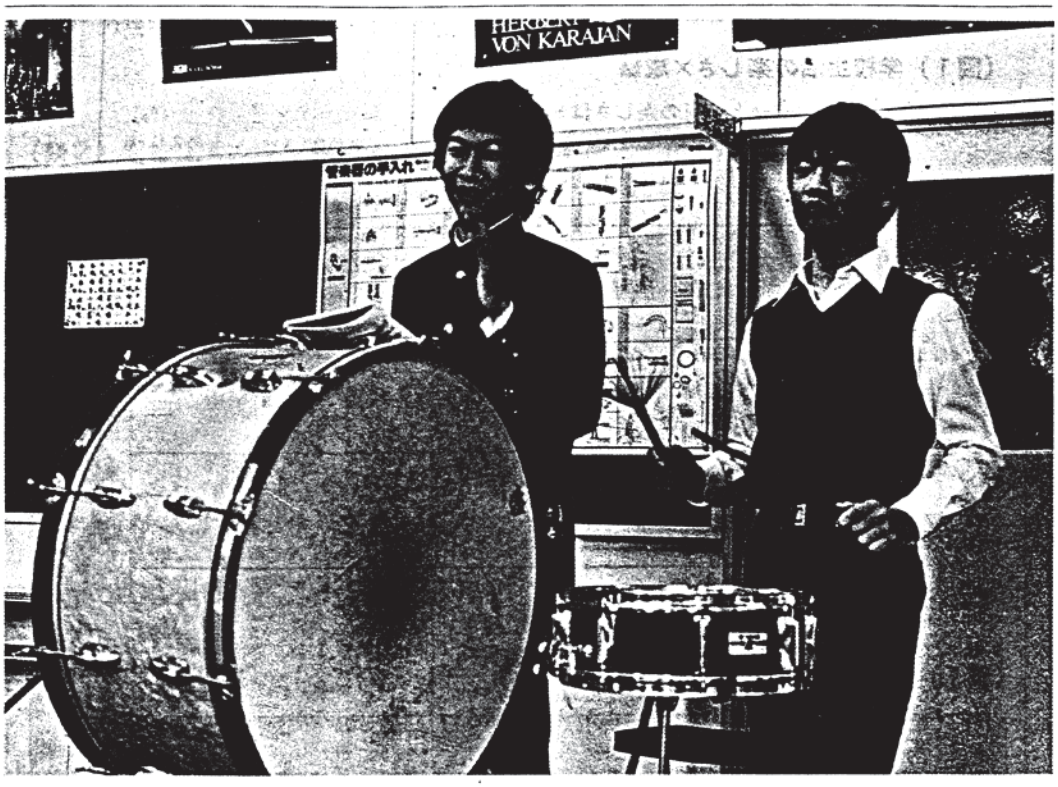
勉強の成績	とても良い	7％	上
	かなり良い	25％	中の上
	ふつう	32％	中
	やや良くない	22％	中の下
	かなり良くない	8％	下
	とても良くない	6％	下
		100％	

を、カテゴリーとしてあるが、学年、性別などの構成は、以下の通りである。

(%)

成績＼学年・性別	学年 中 1	学年 中 2	性 男子	性 女子
上	6.6	5.1	8.5	5.5
中の上	24.8	24.5	26.2	23.0
中	33.9	32.4	31.3	33.4
中の下	20.0	23.7	20.1	23.0
下	14.7	14.3	13.9	15.1

第II章 学校生活の中での成績



1．充足感と成績

まず、**図1(表1)**に目を通してほしい。これは、学校生活の楽しさを成績階層別に示したものだが、図から明らかなように、成績上位群の60%は、学校生活が「とても」「かなり」楽しいと答えているのに対し、中位層の楽しさは42%、下位層は31%となる。

学業成績によって、学校生活の楽しさが異なるというのは、なんとなく理解できる結果だが、もう少し、具体的に、学校生活のどの場面で楽しさが異なるのかを調べてみよう。

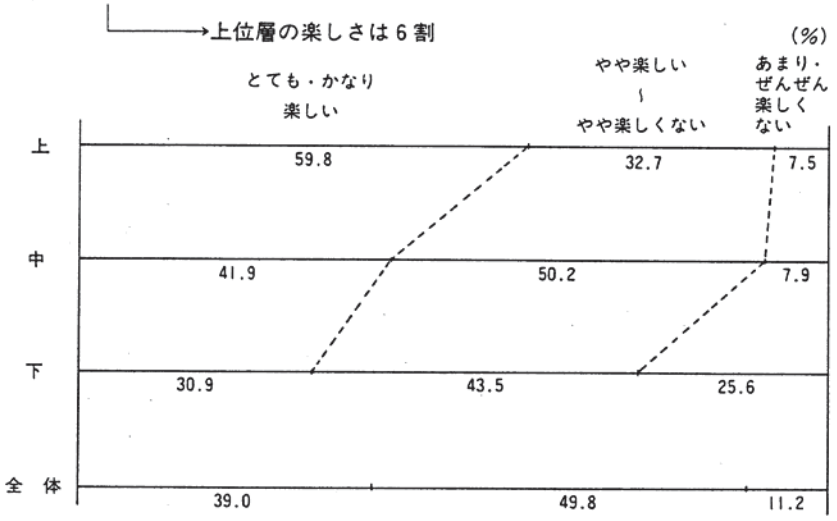
ここでは、学校での気持ちを「楽しさ」という用語では測りきれないように思われるので、「充ち足りている気持ち」を用いることにした。

表2のように、「友との雑談」や「休み時間」に充ち足りた感じがし、「定期テスト」や「英語や数学の授業」が、充足感に欠けるのは、本シリーズにもくり返し指摘してきた傾向だが、ここで問題になるのは、そうした充足感が、学業成績により、どの程度の開きをもたらすかであろう。

図２(表３)によれば、成績下位層は、授業場面以外でも充足感を持てないでいると答えている。そこで、「あまり」「ぜんぜん」充ち足りた感じを持てない生徒の割合を、成績上位層を基準として求めると、下位層では、

１～２倍⇒「友との雑談」、「生徒会や学活」「体育祭や文化祭」

（図１）学校生活の楽しさ×成績



（表１）学校の楽しさ×成績

(%)

尺度／成績	楽しい				ふつう	楽しくない				
	とても	かなり	小計	やや		やや	小計	あまり	ぜんぜん	小計
上	25.9	33.9	59.8	13.6	17.7	1.4	32.7	2.7	4.8	7.5
中の上	20.4	19.5	39.9	19.1	27.6	6.0	52.7	4.7	2.7	7.4
中	23.3	18.6	41.9	18.6	27.6	4.0	50.2	5.1	2.8	7.9
中の下	18.9	12.9	31.8	20.3	25.2	9.8	55.3	7.6	5.3	12.9
下	18.6	12.3	30.9	12.6	24.6	6.3	43.5	11.0	14.6	25.6
全体	21.3	17.7	39.0	17.9	26.1	5.8	49.8	6.1	5.1	11.2

2～3倍⇒「先生との会話」「休み時間」「部活動」「数学の授業」

3倍以上⇒「修学旅行」「定期テスト」「英語の授業」

となる。

成績下位層の生徒にとって学校にいる間は、休み時間や部活動でも、成績不振がひけ目意識をもたらすのか、充足感のなさを味わって

（表２）学校生活の充足感

→友とのふれ合いが充ち足りている時

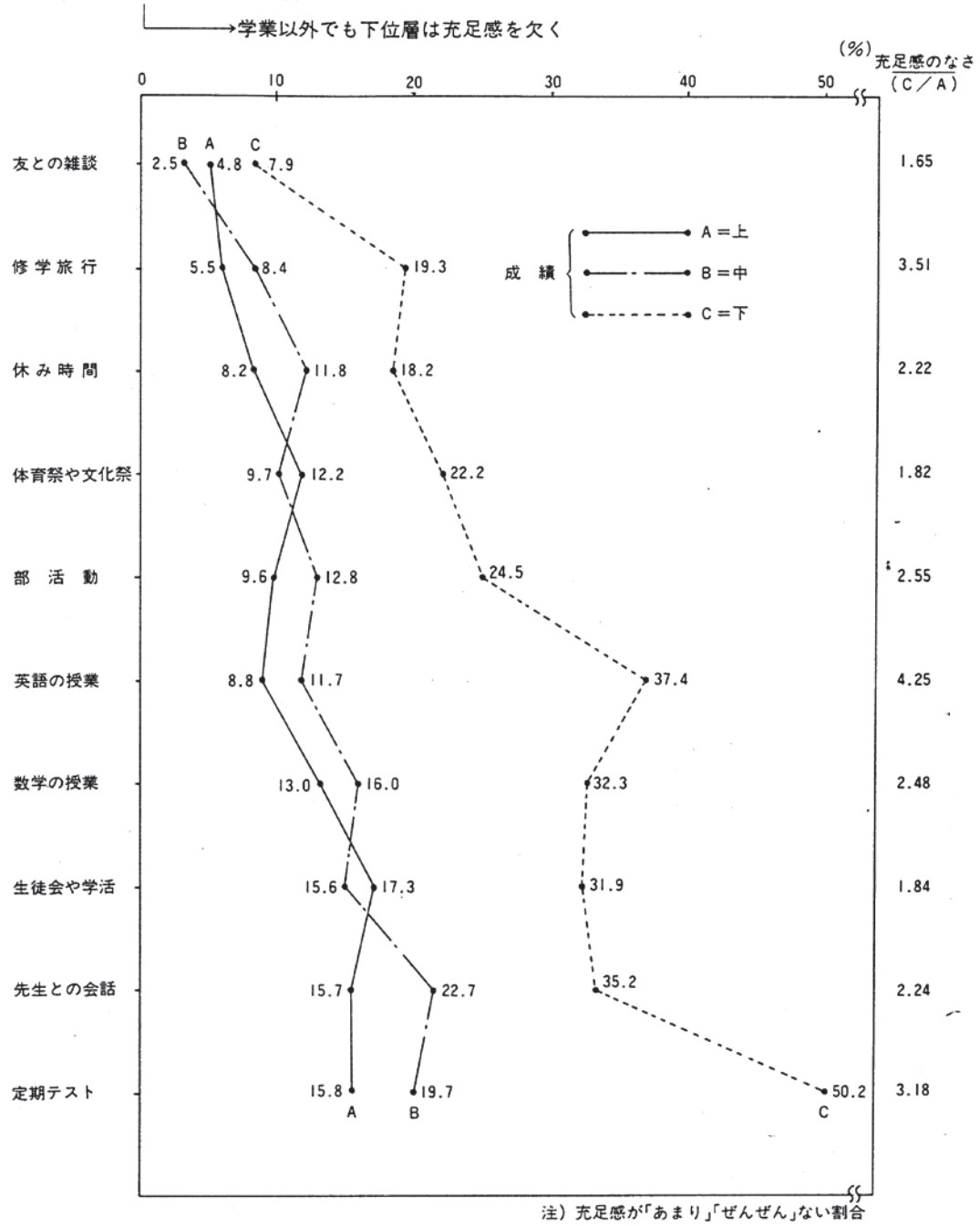
(%)

尺度 / 項目	充足している			まあ充足している	半分半分	まあ充足していない	充足していない			
	とても	かなり	小計				小計	あまり	ぜんぜん	小計
友との雑談	35.3	23.6	58.9	19.0	14.9	3.1	37.0	2.1	2.0	4.1
修学旅行	28.1	20.3	48.4	17.7	17.7	5.7	41.1	4.3	6.2	10.5
休み時間	20.2	16.7	36.9	24.5	19.8	6.9	51.2	5.7	6.2	11.9
体育祭や文化祭	16.0	16.2	32.2	22.9	23.5	9.7	56.1	5.8	5.9	11.7
部活動	15.1	16.4	31.5	21.7	24.0	7.8	53.5	7.9	7.1	15.0
英語の授業	5.8	8.2	14.0	24.0	35.7	9.9	69.6	8.5	7.9	16.4
数学の授業	5.5	11.0	16.5	21.4	30.4	12.7	64.5	9.6	9.4	19.0
生徒会や学活	3.3	6.0	9.3	16.5	38.9	15.5	70.9	11.0	8.8	19.8
先生との会話	5.2	6.9	12.1	15.2	37.1	12.6	64.9	11.0	12.0	23.0
定期テスト	6.3	7.2	13.5	15.5	32.0	13.2	60.7	11.1	14.7	25.8

いるように見える。

そして、こうした傾向は、「自分らしさを発揮しているか」についても、図3(表4)の通りの数値となって表れている。友と遊んでいる時はともあれ、部活動でも、成績が下位になるにつれて、「自分らしさを発揮している」割合は少なくなるし、特に、授業の時では「とても」から「やや」自分らしさを発揮して

(図2) 充足感のなさ×成績



注) 充足感が「あまり」「ぜんぜん」ない割合

いる生徒は、

上　中の上　中　中の下　下
69% ＞ 55% ＞ 33% ＞ 20% ＞ 16%

となる。

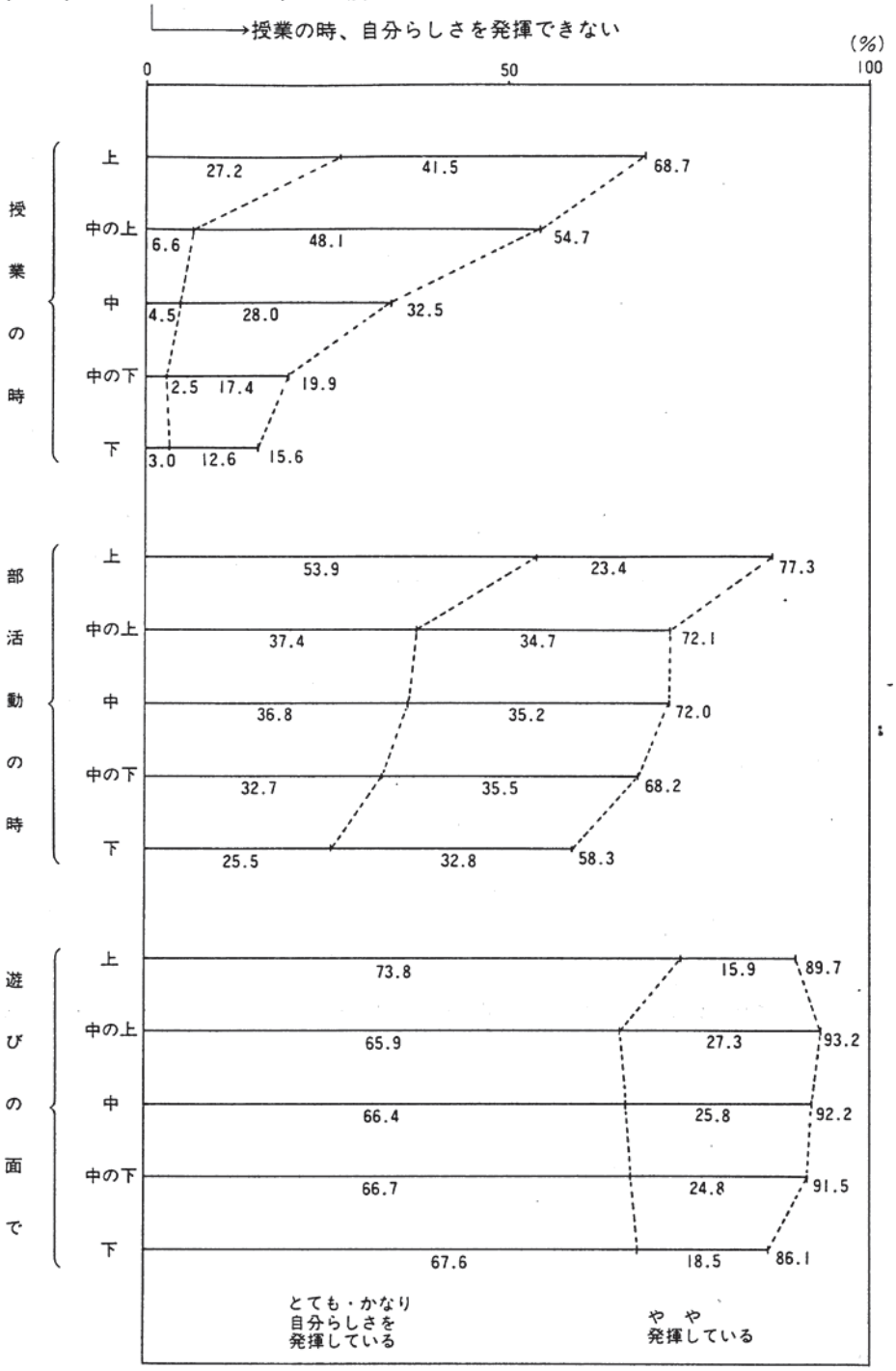
（表３）充足感×成績

（%）

尺度 / 成績 / 項目	とても・かなり充足している					あまり・ぜんぜん充足していない				
	上	中の上	中	中の下	下	上	中の上	中	中の下	下
友との雑談	68.5	57.2	59.5	57.1	58.6	4.8	4.2	2.5	3.6	7.9
修学旅行	67.1	59.0	47.7	44.3	44.6	5.5	8.4	8.4	11.8	19.3
休み時間	49.6	36.5	34.7	34.6	38.6	8.2	8.6	11.8	13.0	18.2
体育祭や文化祭	42.9	31.8	33.4	29.5	28.9	12.2	9.8	9.7	9.7	22.2
部活動	41.8	32.4	32.5	26.4	29.2	9.6	11.9	12.8	17.5	24.5
英語の授業	34.7	18.3	10.8	8.5	11.3	8.8	9.1	11.7	20.4	37.4
数学の授業	28.7	23.4	13.1	10.0	14.3	13.0	12.7	16.0	23.0	32.3
生徒会や学活	18.1	9.4	8.4	5.2	12.1	17.3	17.5	15.6	21.6	31.9
先生との会話	20.6	13.1	10.6	9.3	12.7	15.7	18.0	22.7	23.2	35.2
定期テスト	31.1	14.5	12.2	8.8	12.7	15.8	17.4	19.7	32.7	50.2

注）各階層とも、100%にみたないのは「まあ充足している」と「まあ充足していない」を除外してあるため

（図３）自分らしさの発揮×成績



（表4）自分らしさの発揮×成績

(%)

項目	成績＼尺度	発揮している			発揮していない		
		とても	かなり	やや	あまり	ぜんぜん	小計
授業の時	上	10.9	16.3	(41.5)	26.5	4.8	31.3
	中の上	0.8	5.8	(48.1)	41.0	4.3	45.3
	中	1.2	3.3	28.0	(60.4)	7.1	67.5
	中の下	0.9	1.6	17.4	(66.7)	13.4	80.1
	下	1.0	2.0	12.6	37.1	(47.3)	84.4
	全体	1.7	4.3	29.4	51.1	13.5	64.6
部活動の時	上	(28.1)	25.8	23.4	17.2	5.5	22.7
	中の上	12.3	25.1	(34.7)	21.5	6.4	27.9
	中	11.0	25.8	(35.2)	21.1	6.9	28.0
	中の下	11.1	21.6	(35.5)	22.1	9.7	31.8
	下	13.1	12.4	(32.8)	19.3	22.4	41.7
	全体	12.8	22.8	34.1	20.8	9.5	30.3
遊びの面で	上	(42.1)	31.7	15.9	6.9	3.4	10.3
	中の上	28.5	(37.4)	27.3	5.8	1.0	6.8
	中	31.5	(34.9)	25.8	7.1	0.7	7.8
	中の下	26.6	(40.1)	24.8	6.7	1.8	8.5
	下	(44.2)	23.4	18.5	7.3	6.6	13.9
	全体	32.2	34.7	24.2	6.8	2.1	8.9

注）◯＝各成績層ごとの回答中一番多かった割合

2．授業の理解度

今まで触れてきたように、成績の良し悪しは、授業場面以外でも、生徒たちの気持ちに強い影響を与えているが、そうした成績の良し悪しは、どうして生じるのか。

まず、授業場面に目を向けてみよう。表4をさらに要約して、授業の理解度を以下のように、3つに分けてみると、

(%)

授業の理解	7割以上	5割ぐらい	3割以上
英語	41	31	28
数学	36	33	31
国語	34	44	22
理科	41	37	22
社会科	40	35	25
平均	38	36	26

のように、生徒全体の内、7割以上、授業を理解している者は38%にすぎず、授業が3割以下しかわからない者が26%と、4人に1人を数える。

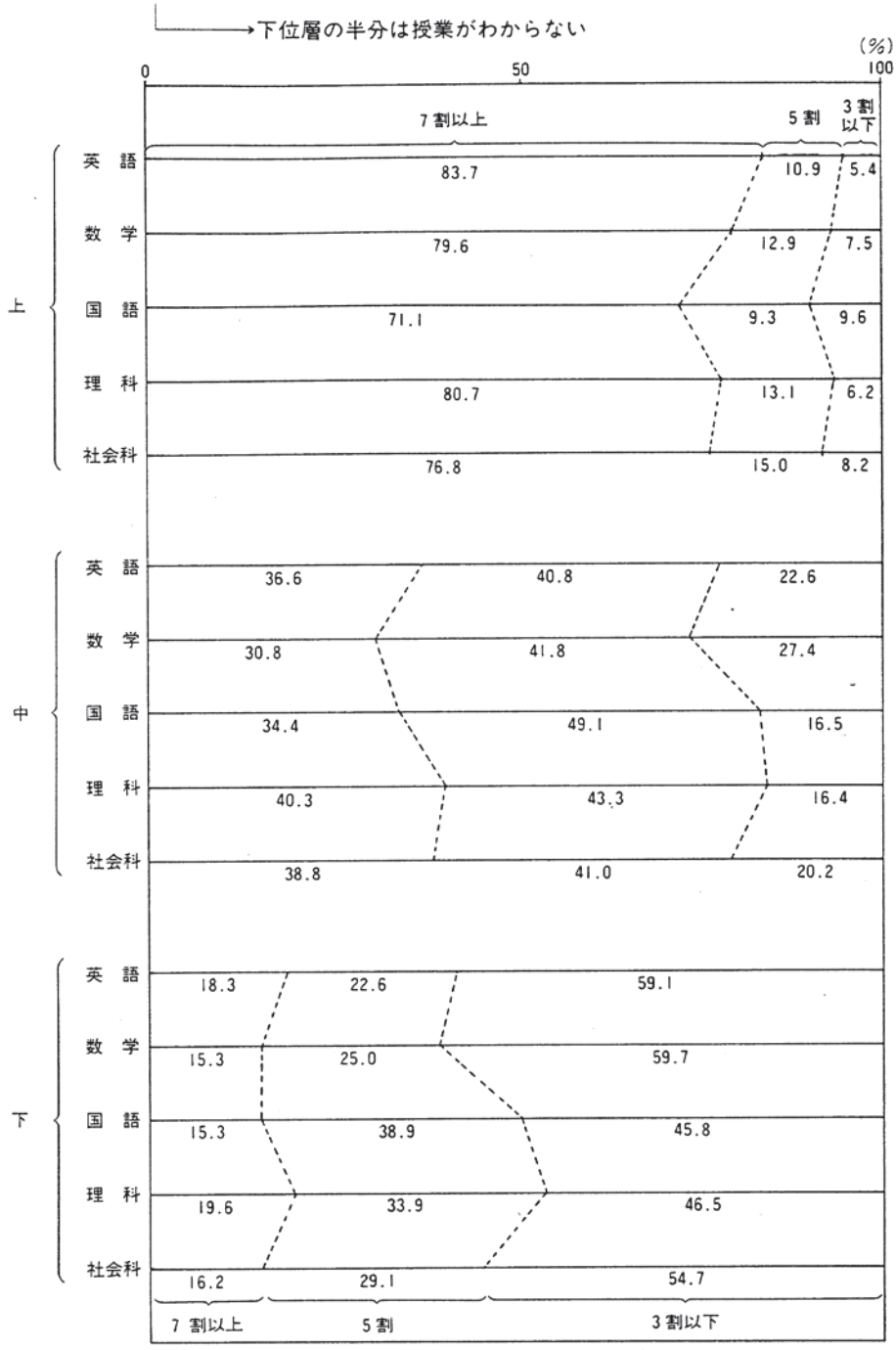
授業のわからない生徒が25%を超えるのは中学教育にとって、あまりに大きな数値のように思われるが、これを、学業成績と関連させて調べると、**図4(表5)**の通りとなる。

つまり、成績上位層は、教科と関係なしに、「7割以上わかる」が7割を超える。しかし、中位層では、「7割以上わかる」が3～4割にすぎなくなり、半数近くが、授業は半分ぐらいしかわからないとなる。そして、下位層では、ほとんどわからないが、数学の60%をはじめとして、5割前後に達している。

授業がわからないのであるから、成績下位層の生徒は、**図5(表6)**から明らかなように、授業の時、つまらないと思いながら、よそ見をしたり、小さくなって、時間が過ぎていくのを待つ。それに対し、上位層は、充ち足りた気持ちで、のびのびと楽しいと思いつつ、先生の話に耳を傾けているとなる。

中学校の場合、英語や数学などを中心に学習内容が難しさを増す。それだけに、授業にわかりにくさを感じるのは、ある程度やむをえないのかもしれない。しかし、かなりの生徒が、わからない授業を、小さくなって聞いている状況を思い浮かべると、もう少し、わかりやすい授業はできないのかという気持ちがしてくる。

（図４）授業の理解度×成績


下位層の半分は授業がわからない
(%)
0
50
100
7割以上
5割
3割以下
上
英語
83.7
10.9
5.4
数学
79.6
12.9
7.5
国語
71.1
9.3
9.6
理科
80.7
13.1
6.2
社会科
76.8
15.0
8.2
中
英語
36.6
40.8
22.6
数学
30.8
41.8
27.4
国語
34.4
49.1
16.5
理科
40.3
43.3
16.4
社会科
38.8
41.0
20.2
下
英語
18.3
22.6
59.1
数学
15.3
25.0
59.7
国語
15.3
38.9
45.8
理科
19.6
33.9
46.5
社会科
16.2
29.1
54.7
7割以上
5割
3割以下

（表５）授業の理解度×成績

→授業がわからない生徒は４人に１人

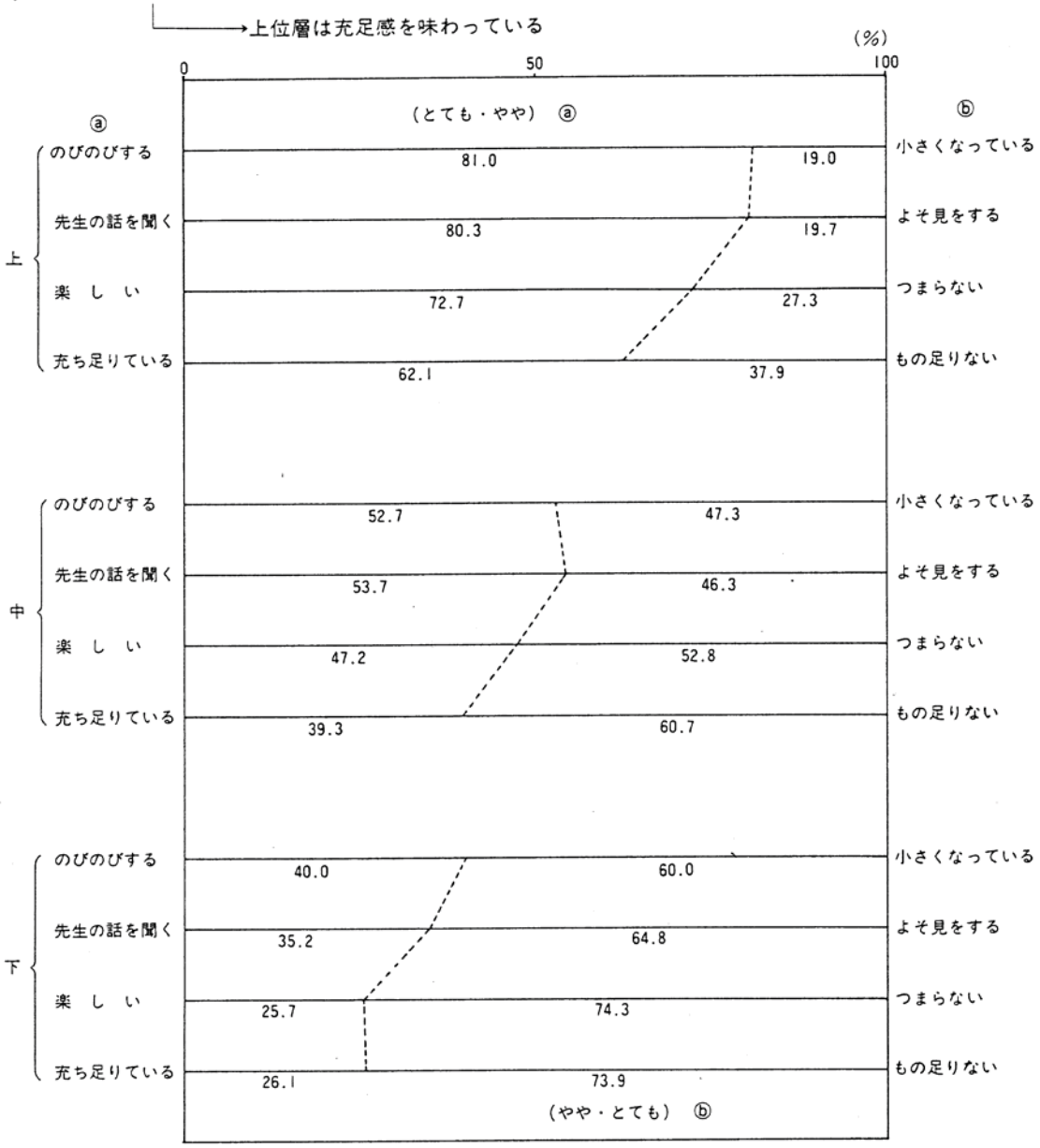
（%）

教科	成績＼尺度	100%わかる	70%わかる	小計	50%わかる	30%わかる	ほとんどわからない
英語	上	(44.9)	38.8	83.7	10.9	2.7	2.7
	中の上	12.4	(52.2)	64.6	28.0	5.8	1.6
	中	6.1	30.5	36.6	(40.8)	19.9	2.7
	中の下	1.3	19.1	20.4	33.8	(34.9)	10.9
	下	3.0	15.3	18.3	22.6	25.6	(33.5)
	全体	9.1	31.8	40.9	31.4	19.1	8.6
数学	上	31.3	(48.3)	79.6	12.9	4.8	2.7
	中の上	9.9	(49.3)	59.2	30.2	8.5	2.1
	中	2.8	28.0	30.8	(41.8)	23.5	3.9
	中の下	1.1	12.7	13.8	36.0	(36.4)	13.8
	下	4.0	11.3	15.3	25.0	(30.0)	29.7
	全体	6.5	29.0	35.5	33.0	22.2	9.3
国語	上	13.8	(57.3)	71.1	19.3	6.2	3.4
	中の上	2.9	41.6	44.5	(43.4)	10.5	1.6
	中	1.6	32.8	34.4	(49.1)	15.2	1.3
	中の下	1.6	20.7	22.3	(49.5)	23.1	5.1
	下	2.3	13.0	15.3	(38.9)	28.9	16.9
	全体	2.9	31.2	34.1	44.3	17.0	4.6
理科（全体）		5.5	35.2	40.7	37.3	16.3	5.7
社会科（全体）		7.8	32.3	40.1	34.7	18.0	7.2

注）◯＝各成績層ごとの回答中一番多かった割合

（図５）授業の時の気持ち×成績

→上位層は充足感を味わっている



（表６）授業の時の気持ち×成績

（%）

ⓐ		ⓐ とても	ⓐ やや	小計	ⓑ やや	ⓑ とても	小計	ⓑ
楽しい	上	23.1	49.6	72.7	18.9	8.4	27.3	つまらない
	中の上	7.9	48.8	56.7	36.0	7.3	43.3	
	中	5.5	41.7	47.2	43.9	8.9	52.8	
	中の下	3.7	23.6	27.3	56.3	16.4	72.7	
	下	3.9	21.8	25.7	38.0	36.3	74.3	
	全体	6.8	37.4	44.2	41.7	14.1	55.8	
のびのびする	上	24.6	56.4	81.0	16.2	2.8	19.0	小さくなっている
	中の上	8.0	58.7	66.7	29.6	3.7	33.3	
	中	4.9	47.8	52.7	43.3	4.0	47.3	
	中の下	7.1	37.9	45.0	46.5	8.5	55.0	
	下	12.9	27.1	40.0	38.9	21.1	60.0	
	全体	8.7	46.1	54.8	38.0	7.2	45.2	
先生の話を聞く	上	40.1	40.2	80.3	16.2	3.5	19.7	よそ見をする
	中の上	15.2	53.7	68.9	27.3	3.8	31.1	
	中	8.2	45.5	53.7	39.1	7.2	46.3	
	中の下	2.6	38.4	41.0	49.1	9.9	59.0	
	下	5.3	29.9	35.2	35.3	29.5	64.8	
	全体	10.9	43.2	54.1	36.0	9.9	45.9	
充ち足りている	上	17.1	45.0	62.1	29.3	8.6	37.9	もの足りない
	中の上	6.3	47.6	53.9	39.2	6.9	46.1	
	中	3.3	36.0	39.3	50.2	10.5	60.7	
	中の下	3.6	24.7	28.3	57.7	14.0	71.7	
	下	3.9	22.2	26.1	44.2	29.7	73.9	
	全体	5.3	35.1	40.4	46.6	13.0	59.6	

注）P.47調査票見本⑨参照

第III章 成績が上下したら

1．成績は自信を支える

成績の良し悪しによって、学校の中にいる時の生徒たちの気持ちが規定されるのは、すでに触れた通りだが、それでは、生徒たちは成績の良し悪しの意味をどのように考えているのであろうか。

図6（表7）に示した通り、生徒たちは、

①成績が良くなったら

（多くなると答えた割合）

1．自分についての自信　78%
2．勉強時間　64%
3．先生との話しやすさ　48%
4．部活動　33%
5．クラスの人気　26%
6．仲の良い友　25%
7．親から叱られる回数　10%

②成績が悪くなったら

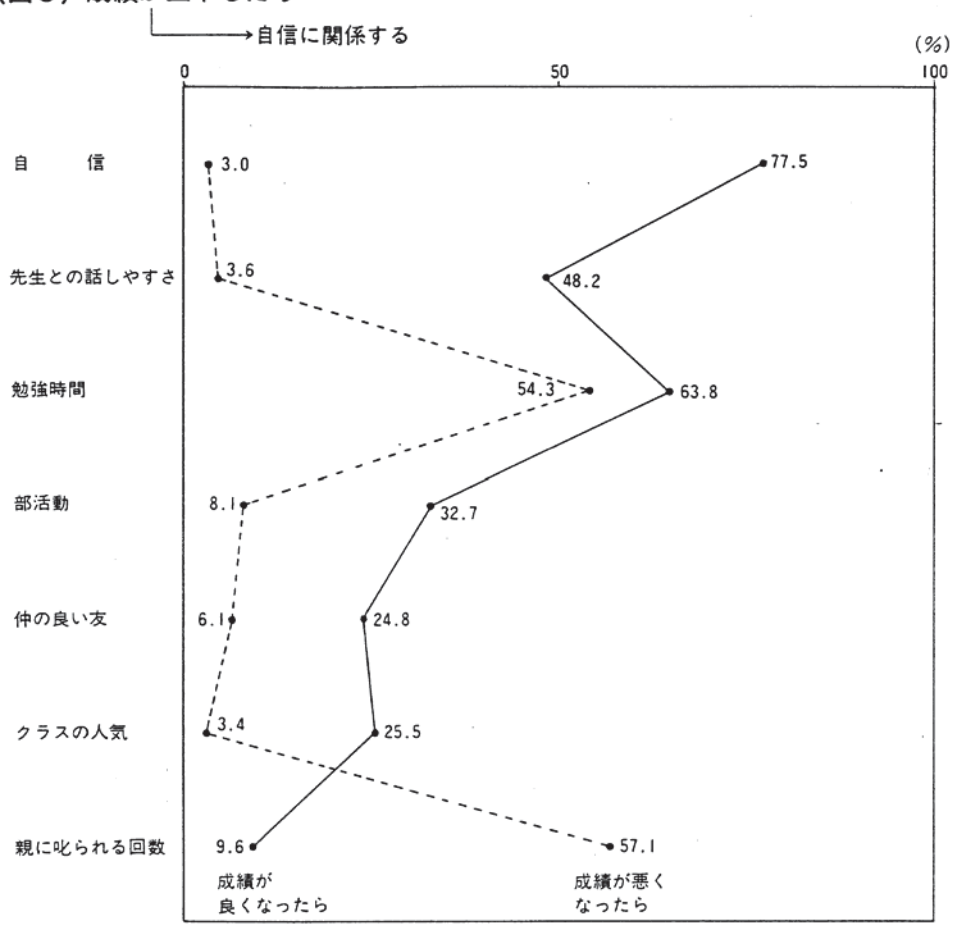
（減ると答えた割合）

1．自分についての自信　75%
2．先生との話しやすさ　53%
3．部活動　31%
4．クラスの人気　24%
5．勉強時間　21%
6．仲の良い友　20%
7．親から叱られる回数　13%

と考えている。つまり、成績が上下したからといって、友だちつき合いの仕方や部活動への打ち込み方が変わるわけではない。しかし、成績が悪くなると、先生と話しにくくなるのは否定できない。それ以上に、成績が上下すれば、自分についての自信に関連するという見方である。

成績が良くなれば、自信が芽ばえてくるが成績が悪くなると、自信を喪失する。したがって、学業成績は、生徒たちにとって、自分に対する自信と同意義的な重みを持っているように見える。しかも、「成績が良くなれば、自信がわき、成績が悪くなると、自信がなくなる」という見方が、成績階層に関係なく、すべての生徒に共有されているのは、**表8**の数値の示す通りである。

（図6）成績が上下したら



注)「とても」「かなり」「少しは」多くなる割合

（表７）成績が良くなったら、悪くなったら

（%）

項目 ＼ 尺度		多くなる				変わらない	減る				
		とても	かなり	小計	少しは		少しは	小計	かなり	とても	小計
成績が良くなったら	自信	25.6	22.5	48.1	29.4	19.4	1.2	50.0	0.4	1.5	1.9
	先生との話しやすさ	11.5	13.4	24.9	23.3	48.5	1.6	73.4	0.2	1.5	1.7
	勉強時間	10.8	20.4	31.2	32.6	29.9	3.3	65.8	0.8	2.2	3.0
	部活動	13.1	7.1	20.2	12.5	57.7	4.3	74.5	1.4	3.9	5.3
	仲の良い友	5.5	6.2	11.7	13.1	68.1	4.0	85.2	1.0	2.1	3.1
	クラスの人気	4.5	4.8	9.3	16.2	67.0	3.6	86.8	1.0	2.9	3.9
	親に叱られる回数	1.5	2.3	3.8	5.8	37.6	33.9	77.3	1.4	17.5	18.9
成績が悪くなったら	自信	1.2	0.6	1.8	1.2	21.7	27.0	49.9	23.9	24.4	48.3
	先生との話しやすさ	1.3	0.7	2.0	1.6	43.2	27.9	72.7	13.1	12.2	25.3
	勉強時間	11.6	17.3	28.9	25.4	24.7	8.5	58.6	5.4	7.1	12.5
	部活動	4.3	1.6	5.9	2.2	60.8	15.5	78.5	6.6	9.0	15.6
	仲の良い友	2.6	1.1	3.7	2.4	74.0	13.4	89.8	3.2	3.3	6.5
	クラスの人気	1.5	0.4	1.9	1.5	72.6	13.9	88.0	4.5	5.6	10.1
	親に叱られる回数	19.6	17.5	37.1	20.0	30.1	6.0	56.1	4.6	2.2	6.8

（表８）成績が上下したら自信は×成績

→成績は自信に関係する

（%）

項目	尺度 / 成績	多くなる				変わらない	減る			
		とても	かなり	少しは	小計		少しは	かなり	とても	小計
成績が良くなったら	上	38.5	27.7	16.2	82.4	15.5	0.7	0.0	1.4	2.1
	中の上	24.7	22.9	30.2	77.8	20.6	0.6	0.2	0.8	1.6
	中	23.9	23.6	33.5	81.0	17.7	0.9	0.1	0.3	1.3
	中の下	20.0	23.2	30.7	73.9	21.2	2.4	0.7	1.8	4.9
	下	33.1	15.3	23.6	72.0	20.3	1.7	0.7	5.3	7.7
成績が悪くなったら	上	5.4	0.0	1.4	6.8	17.6	27.0	29.7	18.9	75.6
	中の上	0.0	0.2	1.4	1.6	22.9	32.0	23.9	19.6	75.5
	中	0.1	1.2	1.3	2.6	19.0	31.8	24.8	21.8	78.4
	中の下	1.1	0.0	0.4	1.5	21.7	23.3	28.2	25.3	76.8
	下	3.3	1.0	2.0	6.3	28.2	12.0	13.3	40.2	65.5

２．成績を良くするには

成績が良くなると、自信らしいものがついてくるが、成績が悪くなると、自信喪失におちいる。そうだろうと思う反面、よく考えてみると、どうして成績の良し悪しが自信につながるのか、理由を尋ねてみたい気がする。

そこで、「勉強の得意な子」と「勉強の苦手な子」をイメージさせて、どうして、そうした開きが生ずるのかを尋ねてみた。

表９に示した通り、生徒たちは、「成績の良い子は、もともと勉強が得意なのではなく、授業をまじめに聞き、帰宅後よく勉強しているからだ」、そして、「勉強の苦手な子は、もともと苦手なのではなく、授業をまじめに聞かず、家へ帰ってもぶらぶら遊んでいるからだ」という。

そして、**表10**によれば、成績を良くするためには、予習や復習に精を出し、先生の話を熱心に聞くことが必要だという。しかも、同表の右欄から明らかなように、成績を上げるのに、予習や復習が大事なことは、学業成績に関係なく、どの生徒たちも共通に認識している。

ここまで触れてきたように、生徒たちは、

①生まれつき、勉強の得意な子、苦手な子はいない

②まじめに努力するから、良い成績がとれる

（表９）勉強の得意・苦手の理由

└──→成績の良いのはまじめだから

（%）

項目 ＼ 尺度		そう思う				そう思わない		
		とても	かなり	小計	やや	あまり	ぜんぜん	小計
勉強の得意な子	授業をまじめに受けている	43.1	31.9	75.0	15.2	5.3	4.5	25.0
	帰宅後勉強	30.2	31.2	61.4	24.3	9.2	5.1	38.6
	もともと得意	20.9	18.1	39.0	30.7	15.9	14.4	61.0
	勉強一本	10.0	13.4	23.4	26.1	29.9	20.6	76.6
勉強の苦手な子	授業をまじめに受けていない	43.3	27.8	71.1	19.6	5.4	3.9	28.9
	家で勉強しない	33.4	28.5	61.9	25.7	7.4	5.0	38.1
	もともと苦手	18.3	17.8	36.1	28.8	20.0	15.1	63.9
	勉強以外のことをしている	21.9	22.2	44.1	25.9	17.0	13.0	55.9

（表10）成績を良くするには

└──→予習や復習が鍵

（%）

項目 ＼ 尺度	効果がある				効果がない			とても効果がある				
	とても	かなり	小計	やや	あまり	ぜんぜん	小計	上	中の上	中	中の下	下
復習を熱心にする	37.7	39.8	77.5	17.3	3.3	1.9	22.5	49.7	40.6	36.4	29.5	42.3
先生の話を熱心に聞く	36.0	38.9	74.9	19.5	3.8	1.8	25.1	56.7	39.3	33.0	28.7	36.8
予習を熱心にする	17.8	31.7	49.5	36.1	10.9	3.5	50.5	26.5	14.7	17.8	14.7	23.1
学習塾へ行く	7.1	22.3	29.4	41.0	21.6	8.0	70.6	10.2	6.7	5.4	6.1	11.0
家庭教師につく	7.6	20.0	27.6	38.1	22.5	11.8	72.4	12.4	5.4	4.9	7.6	14.2
参考書をたくさん買う	2.9	9.6	12.5	37.8	37.0	12.7	87.5	8.8	2.0	1.8	2.7	4.7
通信教育に入会する	3.7	9.0	12.7	38.2	32.6	16.5	87.3	10.2	3.0	2.6	2.5	6.1

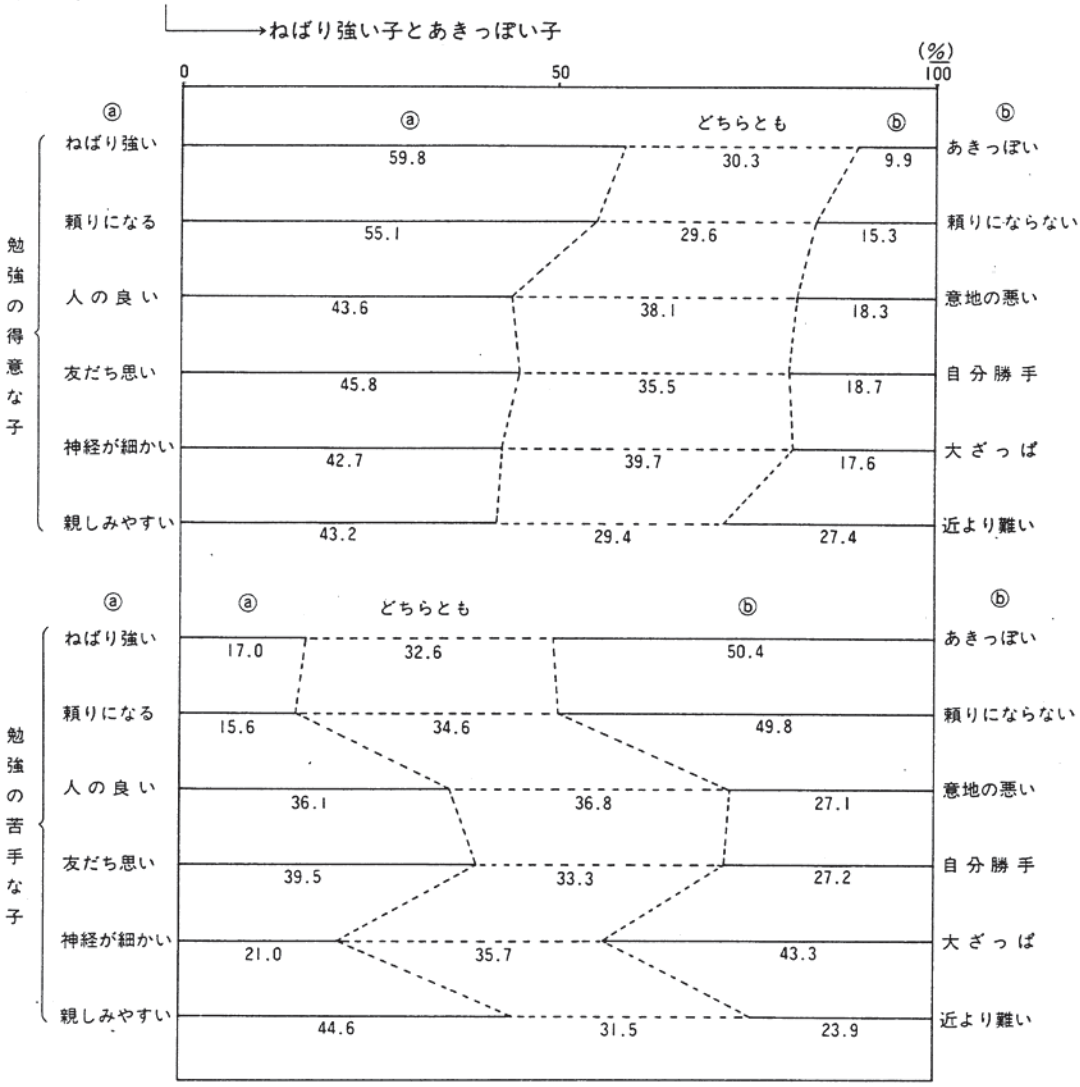
③具体的には、予習や復習が重要
④そうした努力を反映するから、成績の良し悪しは、自分の自信につながる
⑤そして、成績が良いと、学校で明るく毎日を過ごせるが、成績が悪くなると、暗い感じで学校生活を過ごさなければならなくなる

のように考えている。こうした考え方の中のどこかに無理が潜んでいると思われる。そうした考察は後の機会に触れることにするが、上記のような成績観は、図7(表11)に表れている。

これは、生徒たちに、勉強の得意な子と苦手な子とを連想させて、その子がどんな性質の子なのかを尋ねた結果である。図から明らかなように、

①成績の良し悪しにあまり関係のない性質
人の良さ―意地の悪さ
友だち思い―自分勝手
親しみやすい―近づき難い
②成績の良し悪しに関係する性質
成績の良い子…ねばり強い
頼りになる
神経が細かい

(図7) 勉強の得意な子・苦手な子のイメージ



成績の悪い子…あきっぽい
頼りにならない
大ざっぱ

となる。つきつめて言うと、成績不振の子はあきっぽいが、勉強の得意な子はねばり強いという評価である。

もちろん、**表12**によると、塾通いの比率に成績による開きは認められなかったし、家庭教師についている割合にも成績間の落差は認められなかった。しかし、予習や復習をしている割合は、**表13**から明らかなように、

	予習	復習
上	22%	40%
	∨	∨
中の上	13%	29%
	∨	∨
中	9%	24%
	∨	∨
中の下	7%	15%
下	7%	18%

（「いつも」「大体」している割合）

さすがに、上位層へいくほど、予・復習をしている生徒の比率は高い。そうした意味では、成績の良さは努力の反映という見方に、一面の真理が含まれている事実は否定し難い。

（表11）勉強の得意な子・苦手な子のイメージ

(%)

	ⓐ	ⓐ				どちらとも	ⓑ					ⓑ
		とても	かなり	小計	少しは		少しは	小計	かなり	とても	小計	
勉強の得意な子	ねばり強い	14.6	21.0	35.6	24.2	30.3	5.4	59.9	1.4	3.1	4.5	あきっぽい
	頼りになる	14.1	18.6	32.7	22.4	29.6	6.1	58.1	3.0	6.2	9.2	頼りにならない
	人の良い	10.0	14.5	24.5	19.1	38.1	8.0	65.2	3.6	6.7	10.3	意地の悪い
	友だち思い	8.7	15.4	24.1	21.7	35.5	8.7	65.9	3.8	6.2	10.0	自分勝手
	神経が細かい	7.0	12.5	19.5	23.2	39.7	8.7	71.6	3.8	5.1	8.9	大ざっぱ
	親しみやすい	10.2	14.5	24.7	18.5	29.4	12.6	60.5	6.3	8.5	14.8	近より難い
勉強の苦手な子	ねばり強い	4.2	3.8	8.0	9.0	32.6	19.4	61.0	13.2	17.8	31.0	あきっぽい
	頼りになる	3.4	2.8	6.2	9.4	34.6	16.8	60.8	12.2	20.8	33.0	頼りにならない
	人の良い	9.5	9.8	19.3	16.8	36.8	9.6	63.2	6.6	10.9	17.5	意地の悪い
	友だち思い	9.3	11.5	20.8	18.7	33.3	10.4	62.4	6.3	10.5	16.8	自分勝手
	神経が細かい	3.8	5.0	8.8	12.2	35.7	17.7	65.6	12.0	13.6	25.6	大ざっぱ
	親しみやすい	11.0	13.6	24.6	20.0	31.5	8.5	60.0	5.9	9.5	15.4	近より難い

そして、生徒たちは、成績の下位の生徒は、好きなマンガやテレビをがまんせずに、好きなだけ見ているのではないかと思っている(表14参照)。しかし表15に示したように、実際の時間の使い方に、生徒たちが考えているほどの開きは認められない。例えば、

	テレビを1時間半以下しか見ない	家庭で2時間以上勉強している
上	47%	37%
中の上	41%	32%
中	40%	31%
中の下	31%	28%
下	34%	25%

(表12) 家庭学習×成績

→通塾率に開きはない

(%)

尺度 / 成績	学習塾			家庭教師		通信教育		
	通っていない	通っている		ついていない	ついている	利用していない	とっている	
		週1～2回	3回以上				利用していない	よく利用している
上	44.2	33.3	22.5	88.1	11.9	72.9	10.4	16.7
中の上	45.6	35.9	18.5	93.0	7.0	77.4	10.7	11.9
中	46.4	34.3	19.3	92.7	7.3	77.4	12.8	9.8
中の下	52.4	30.8	16.8	91.0	9.0	77.7	16.5	5.8
下	48.0	35.7	16.3	91.3	8.7	77.9	12.4	9.7
全体	47.5	34.0	18.5	91.9	8.1	77.2	12.8	10.0

の通りである。つまり、成績上位層だからといって、特に長い時間勉強をしているのではない。しかし、時間を能率よく活用している結果が、すでに紹介した表13の「予習や復習をしている」となって表れているのであろう。

（表13）予習や復習×成績

→成績の良い子は予・復習をしている

（%）

項目	尺度／成績	している						しない		
		いつも	大体	小計	時々	たまに	小計	めったに	ぜんぜん	小計
予習	上	4.8	17.0	21.8	27.2	17.0	44.2	23.1	10.9	34.0
	中の上	2.5	10.1	12.6	26.1	19.7	45.8	24.4	17.2	41.6
	中	0.4	8.2	8.6	30.6	29.2	59.8	19.9	11.7	31.6
	中の下	0.7	6.0	6.7	21.4	28.5	49.9	31.2	12.2	43.4
	下	2.3	5.0	7.3	17.5	22.4	39.9	22.1	30.7	52.8
	全体	1.6	8.3	9.9	25.2	25.0	50.2	24.0	15.9	39.9
復習	上	12.9	27.1	40.0	21.2	14.3	35.5	17.7	6.8	24.5
	中の上	6.1	23.3	29.4	24.0	20.0	44.0	16.4	10.2	26.6
	中	4.3	19.6	23.9	30.6	24.9	55.5	13.0	7.6	20.6
	中の下	1.6	13.0	14.6	26.2	26.0	52.2	25.6	7.6	33.2
	下	4.6	13.5	18.1	14.2	22.5	36.7	21.8	23.4	45.2
	全体	4.8	18.7	23.5	25.0	22.8	47.8	18.2	10.5	28.7

(表14) 勉強の苦手な子の勉強の仕方(推定)

→がまんをしていない

(%)

尺度 / 項目	がまんしている				がまんしていない		
	しょっちゅう	時々	たまに	小計	ほとんど	全く	小計
好きなマンガ	4.4	13.4	23.6	41.4	29.7	28.9	58.6
好きなテレビ	4.6	12.5	24.1	41.2	28.4	30.4	58.8
寝ること	4.2	9.1	25.6	38.9	30.2	30.9	61.1
部活動	3.2	6.9	24.9	35.0	29.6	35.4	65.0
友との遊び	3.2	5.4	17.6	26.2	28.8	45.0	73.8

(表15) 家庭での時間の過ごし方

→ほとんど差が認められない

(%)

項目	尺度 / 成績	0～30分	1時間～1時間半	2時間～2時間半	3時間	3時間半以上
テレビ視聴	上	10.9	35.7	27.4	13.0	13.0
	中の上	8.0	33.3	30.5	15.2	13.0
	中	5.1	35.2	35.0	13.4	11.3
	中の下	4.9	26.3	32.3	17.9	18.6
	下	6.1	28.0	31.2	12.6	21.9
	全体	6.4	31.8	32.2	14.7	14.9
家庭学習	上	19.2	43.8	26.7	5.5	4.8
	中の上	24.3	43.8	26.5	4.6	0.8
	中	20.5	48.2	26.6	3.9	0.8
	中の下	23.4	48.8	24.1	2.8	0.9
	下	33.3	42.0	21.8	2.5	0.4
	全体	23.8	46.1	25.4	3.7	1.0

第Ⅳ章 成績と未来像

1．どういう生活を送りそうか

今まで触れたように、生徒たちは、成績の良さの価値を高く評価する見方をしていた。特に、成績が上がると自信が強まり、成績が下がると、自分についての自信が失われるという感じ方が印象的であった。

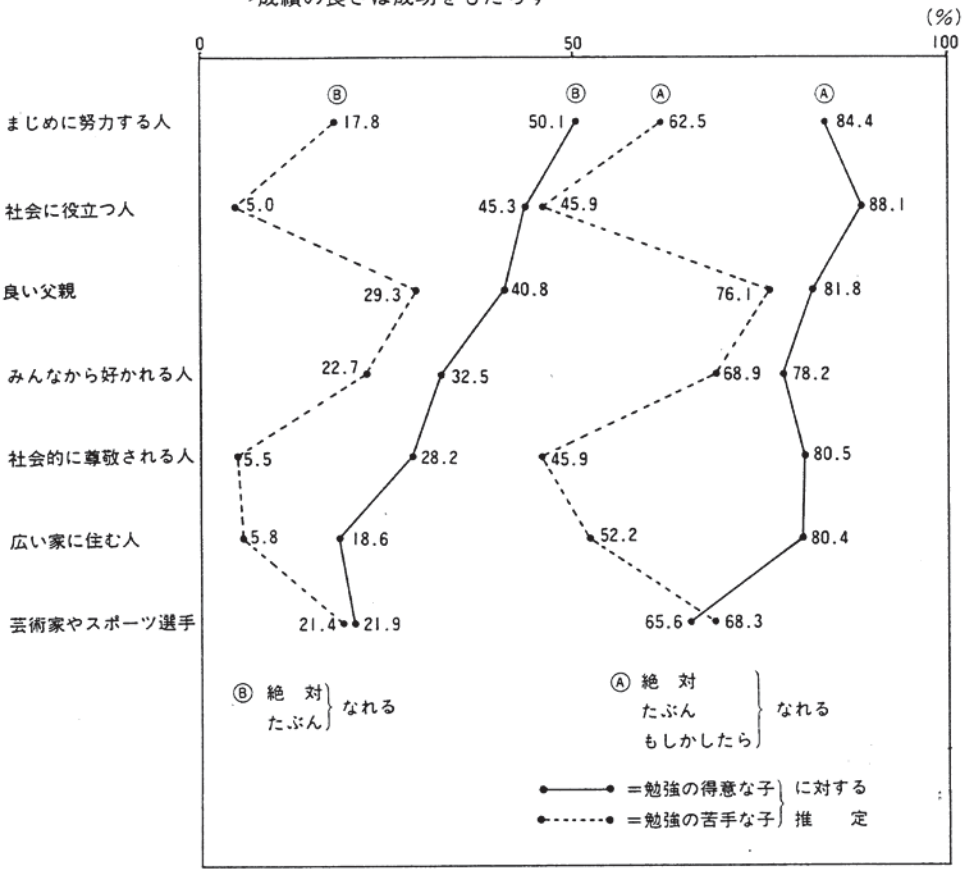
そこで、成績の良し悪しが、どうしてそうした重みを持つのかを、未来との関連でとらえてみよう。

図8（表16）は、勉強の得意な子と苦手な子とをイメージにおいて、そうした生徒が、どういう人生を送りそうなのかを推定させた結果である。図中のⒷは「絶対」「たぶん」なれる、ⒶはⒷに「もしかしたらなれる」を加えた数値で、勉強の得意な子に対する推定は実線で、苦手な子は破線で示してある。

この結果によると、生徒たちは、勉強の得意な子は、まじめに努力をするだろうから、社会に役立つ人になり、社会的な尊敬を集めることも可能だろうという。しかし、勉強の苦手な子は、芸術家やスポーツ選手といった個性的な生き方はできるかもしれないし、良い父親になるのも可能だろうが、社会に役立ち、社会的に尊敬される人になるのは見込み薄だろうとみなしている。

（図８）勉強の得意な子・苦手な子の未来（推定）

成績の良さは成功をもたらす



（表16）勉強の得意な子・苦手な子の未来（推定）

（%）

項目	尺度	なれる				なれない		
		絶対	たぶん	もしかしたら	小計	まあ	絶対	小計
勉強の得意な子	まじめに努力する人	14.0	36.1	34.3	84.4	10.6	5.0	15.6
	社会に役立つ人	8.7	36.6	42.8	88.1	8.0	3.9	11.9
	良い父親	9.6	31.2	41.0	81.8	12.1	6.1	18.2
	みんなから好かれる人	7.5	25.0	45.7	78.2	15.8	6.0	21.8
	社会的に尊敬される人	5.6	22.6	52.3	80.5	13.9	5.6	19.5
	広い家に住む人	3.4	15.2	61.8	80.4	13.8	5.8	19.6
	芸術家やスポーツ選手	4.7	17.2	43.7	65.6	24.1	10.3	34.4
勉強の苦手な子	まじめに努力する人	5.1	12.7	44.7	62.5	25.3	12.2	37.5
	社会に役立つ人	2.1	2.9	40.9	45.9	38.4	15.7	54.1
	良い父親	8.2	21.1	46.8	76.1	15.0	8.9	23.9
	みんなから好かれる人	5.6	17.1	46.2	68.9	21.0	10.1	31.1
	社会的に尊敬される人	2.7	2.8	40.4	45.9	38.8	15.3	54.1
	広い家に住む人	2.9	2.9	46.4	52.2	34.9	12.9	47.8
	芸術家やスポーツ選手	5.4	16.0	46.9	68.3	20.9	10.8	31.7

2．成績階層と将来の生活

しかし、これらは、あくまで一般的に、成績の良い子と不振ぎみの子についての見通しを尋ねたので、生徒自身の未来像とは必ずしも関係していない。そこで、成績階層によって、生徒たちの未来像がどの程度異なるのかに触れてみたい。

将来の進路予定を**表17**に示した。表から明らかなように、成績が上位になるにつれて、4年制大学への進学見通しを抱く生徒の占める割合が増す。しかも、**表18**から明らかなように、いわゆる一流大学への入学見通しも成績が下位になるにつれて、入るのは「とても」無理と思う割合が、中位では3割を超え、下位層では5割を上回っている。

さらに、**表19**に、社会的な達成への断念率を示した。これは、「なるならないは別として、一生懸命に頑張っても、なれないと思うもの」に、○をつけさせた結果だが、どの職種についても、成績が下位になるにつれて、「とても」なれないと思う割合、つまり断念率

が高まっている。

念のために、大会社の課長から国会議員までの６種への断念率を平均の形で示すと

	断念率の平均
上	42%
中の上	52%
中	58%
中の下	65%
下	69%

の通りの結果となる。

もっとも、成績の良い生徒がいわゆる一流大学へ入学でき、専門職へつけると思う割合が多いことは、成績の良さが大学入試と関係深く、それと同時に、専門職への達成が高学歴の取得を媒介としているだけに納得できる面を含んでいる。

（表17）将来の進路×成績

→成績の良い子の大半は進学

(%)

成績＼将来の進路	中学でやめる	高校まで	短大か専門学校	四年制大学
上	1.4	11.9	14.7	72.0
				∨
中の上	0.6	16.7	21.9	60.8
				∨
中	0.5	31.3	31.9	36.3
				∨
中の下	1.4	45.5	26.2	26.9
				∨
下	2.1	46.0	28.0	23.9
全体	1.0	31.4	26.4	41.2

(表18) 将来大学へ入れそうか×成績

└──→トップ層は入れそうな気持ち

(%)

大学	尺度／成績	無理 とても	無理 かなり	無理 やや	無理 小計	入れる なんとか	入れる たぶん	入れる 小計
東大や京大など	上	17.1	15.8	20.5	53.4	30.8	15.8	46.6
		∧						∨
	中の上	24.3	22.5	25.2	72.0	22.9	5.1	28.0
		∧						∨
	中	32.1	25.8	21.4	79.3	17.1	3.6	20.7
		∧						∨
	中の下	46.2	24.4	14.7	85.3	10.2	4.5	14.7
		∧						
	下	59.8	12.5	11.1	83.4	9.8	6.8	16.6
	全体	36.3	22.0	19.3	77.6	16.9	5.5	22.4
早大や慶大など	上	14.3	10.9	13.6	38.8	37.4	23.8	61.2
		∧						∨
	中の上	14.6	19.5	27.2	61.3	30.8	7.9	38.7
		∧						∨
	中	25.7	22.1	25.8	73.6	21.6	4.8	26.4
		∧						∨
	中の下	33.8	27.6	15.2	76.6	18.6	4.8	23.4
		∧						∨
	下	53.3	13.4	11.1	77.8	14.8	7.4	22.2
	全体	27.9	20.7	20.8	69.4	23.4	7.2	30.6

(表19) 社会的な達成への断念率×成績

(%)

項目	全体	上		中の上		中		中の下		下
大会社の課長以上	41.7	25.0	<	32.7	<	39.5	<	50.0	<	58.1
外交官	54.8	38.5	<	46.3	<	55.1	<	60.9	<	67.8
医師	55.9	41.2	<	52.0	<	53.4	<	62.2	<	66.1
大学教授	62.0	39.9	<	52.1	<	65.1	<	70.1	<	70.8
弁護士	62.6	37.2	<	57.6	<	63.2	<	69.6	<	72.3
国会議員	73.5	67.6	<	70.6	<	74.1	<	75.7	<	76.7

3．将来の家庭生活

したがって、成績の良し悪しが社会的な達成と関係を持つのは否定し難いように考えられるが、それならば、職業生活以外の未来像と学業成績は、どのような関連を持つのであろうか。

表20は、中学生の家庭生活像を示している。

●結婚をしたら、夫に弁当を持っていかせる(持っていく)

●結婚をしたら、できるだけ早く、1～2人の子どもを産むつもり

●妻は家庭に入り、夫は家事を手伝わなくともよい

(表20) 将来の家庭生活

古風とも言えるイメージ

(%)

	ⓐ	絶対	まあ	まあ	絶対	ⓑ
夫の昼	お弁当	39.7	46.4	10.5	3.4	外食
		86.1		13.9		
夫の手伝い	手伝うのが当然	6.3	22.7	39.2	31.8	手伝わなくともよい
		29.0		71.0		
出産時	できるだけ早く	19.1	51.3	24.1	5.5	生活を楽しんでから
		70.4		29.6		
子どもの数	4～5人	4.6	17.7	48.1	29.6	1～2人
		22.3		77.7		
妻が発熱	会社を休む	29.2	40.5	24.0	6.3	会社へ行く
		69.7		30.3		
日曜の仕事	仕事をしない	5.6	14.2	53.3	26.9	仕事をする
		19.8		80.2		
しつけ	きちんと	27.8	30.3	25.6	16.3	自由に
		58.1		41.9		
妻	家庭に	39.4	44.4	12.4	3.8	働く
		83.8		16.2		

など、むしろ古風と言えるような、性差に対応した役割の分化した家庭を未来のマイホームとして抱いている。

しかし、ここでは、中学生の家庭観が保守的すぎるなどと指摘するつもりはない。本稿のテーマに則して言えば、そうした家庭観に学業成績による開きが認められるかどうかであろう。**表21**に、クロス集計結果を示したが、右端の差の項目から明らかなように、差そのものが少ないだけでなく、成績階層間に有意な開きを認め難い。

したがって、どの成績かによって、家庭像が異なることはないと考えられるが、しかし、これは、生徒たちが、そうした家庭をイメージにおいているだけであって、この設問ではそうした家庭を築けるかどうかは明らかでない。そこで、社会的な達成に、家庭作りを含めて、達成への可能性を尋ねることにした。

表22に、結果の概要を示したが、全体として、達成に対する見通しの暗さが目につく。

生徒たちは、もしかしたら、みんなから好かれ、まじめに努力するタイプの良い親になれるかもしれない。しかし、社会的に権威を持ち、社会に役立つ人になるのは難しいだろ

（表21）将来の家庭生活×成績

→成績による差は少ない

(%)

項目＼成績	上	中の上	中	中の下	下	最大値最小値の差
夫の昼・お弁当	86.9	84.7	◯87.7	86.5	×83.5	4.2
夫手伝わなくとも	×64.2	70.1	70.2	◯75.6	72.1	11.4
出産時早く	71.3	◯73.4	70.0	70.7	×64.5	8.9
子ども1～2人	×72.2	75.7	77.1	◯83.8	77.4	11.6
妻が病気の時会社を休む	×66.6	69.0	69.7	70.2	◯70.4	3.8
休日仕事する	78.2	◯81.8	80.7	81.2	×76.2	5.6
子どもをきちんとしつける	◯60.6	59.9	59.1	×53.8	59.1	6.8
妻は家庭に	◯88.3	83.9	84.4	82.6	×82.1	6.2

注）「絶対」「まあ」そう思う割合　◯＝最大値
×＝最小値

うと考えている。中学生にしては、未来に夢を持たなすぎる印象を受けるが、それを成績別に集計し直したのが、表23(図9)である。

「まあ」「絶対」なれないだろうと、将来の可能性を感じられない生徒は、

	上		中		下
良い父親(母親)に	8%	<	11%	<	29%
努力する人に	13%	<	24%	<	42%
広い家に住む人に	36%	<	48%	<	58%
社会的に尊敬される人に	40%	<	56%	<	61%

(表22) 将来どんな人になれそうか

→未来は暗い感じがする

(%)

尺度 / 項目	なれる			もしかしたらなれる	なれない		
	絶対	たぶん	小計		まあ	絶対	小計
良い父親(母親)	9.9	24.2	34.1	51.7	10.6	3.6	14.2
みんなから好かれる人	4.4	12.8	17.2	62.0	17.7	3.1	20.8
まじめに努力する人	6.1	15.2	21.3	52.9	20.4	5.4	25.8
芸術家やスポーツ選手	5.0	9.8	14.8	43.1	33.4	8.7	42.1
広い家に住む人	3.6	2.5	6.1	44.7	40.5	8.7	49.2
社会に役立つ人	3.5	3.2	6.7	41.0	43.3	9.0	52.3
社会的に尊敬される人	3.5	4.0	7.5	38.3	44.4	9.8	54.2

(表23) 将来どんな人になれそうか×成績

(%)

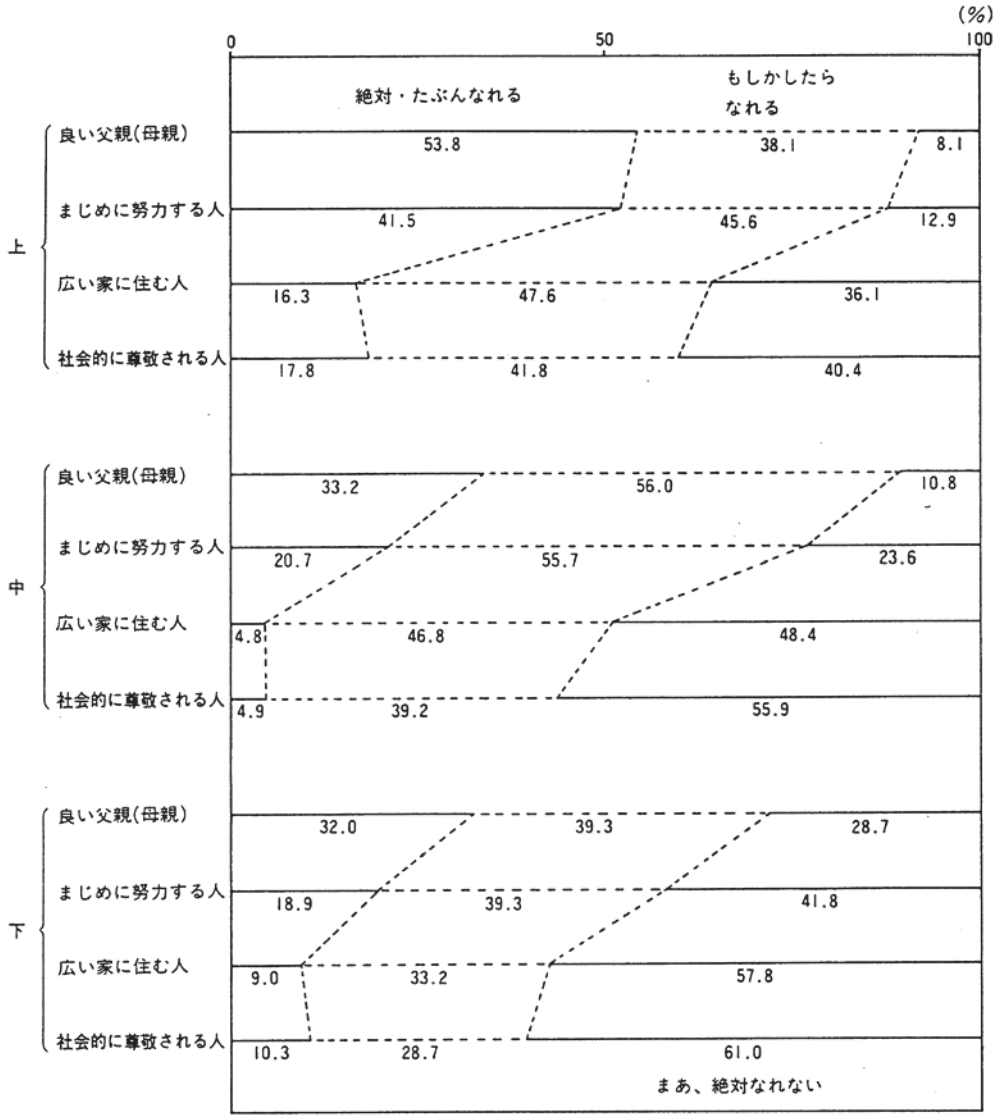
尺度 / 成績 / 項目	絶対・たぶんなれる					まあ・絶対なれない				
	上	中の上	中	中の下	下	上	中の上	中	中の下	下
良い父親(母親)	53.8	37.2	33.2	26.9	32.0	8.1	11.2	10.8	15.3	28.7
みんなから好かれる人	31.3	18.9	16.1	13.6	15.4	14.9	17.0	15.3	25.7	35.4
まじめに努力する人	41.5	24.6	20.7	14.1	18.9	12.9	18.3	23.6	31.2	41.8
芸術家やスポーツ選手	22.4	12.9	14.4	2.8	18.3	38.1	39.7	39.6	45.9	47.8
広い家に住む人	16.3	4.8	4.8	3.3	9.0	36.1	40.4	48.4	59.8	57.8
社会に役立つ人	18.3	6.8	5.1	3.1	9.6	29.9	41.1	52.2	65.2	64.4
社会的に尊敬される人	17.8	7.4	4.9	5.9	10.3	40.4	44.6	55.9	63.2	61.0

注) 表中で100%にならない残りは「もしかしたらなれる」割合

のように、成績が下位になるにつれて増加していく。つまり、成績の下位の生徒は、社会的な達成はむろんのこと、家庭作りについても、見通しの暗さを予感している。「もしかしたらなれる」を含めて、良い父親（母親）になれると思う割合が、下位層の生徒の場合、71%にとどまるのが、その例証となろう。

すでに触れたように、成績の良し悪しは生徒の自信と関連していた。それだけに、成績が不振ぎみになると、自信が失われ、それが、

（図9）将来どんな人になれそうか×成績



現在だけでなく、未来について、それも、社会的な達成にとどまらず、将来の家庭生活に対しても、見通しの暗さとなって表れるのであろう。

そうした自信のなさと成績との関連は、**表24・表25・図10**に詳しいが、中でも図10に着目してほしい。「自分はつまらない人間だ」と思う生徒の割合は、成績上位層では39%——この数値も多いが——にとどまっているが、中位層だと47%に達し、下位層では61%に及んでいる。

最後に、**表26**と**図11**に目を通してほしい。中学生ならば、程度の差こそあれ、自分に自信を持っているのが当然であろう。しかし、

(表24) 自己評価

(%)

尺度 / 自己評価	思われたいと思う			少し	思わない		
	いつも	わりと	小計	そう思う	あまり	ぜんぜん	小計
人の役に立つ人だと	10.7	16.1	26.8	42.6	21.9	8.7	30.6
頼りになる人だと	10.3	15.4	25.7	38.6	25.6	10.1	35.7
先生から関心を持たれていないと	10.0	10.5	20.5	30.9	38.9	9.7	48.6
友の中の人気者だと	7.4	11.7	19.1	33.7	35.9	11.3	47.2
人の上に立つ人だと	6.0	9.5	15.5	29.6	40.2	14.7	54.9
運のいい人だと	4.8	6.2	11.0	24.8	40.8	23.4	64.2
優秀な人だと	3.8	6.8	10.6	28.0	42.3	19.1	61.4

尺度 / 項目	思わない			少し	思っている		
	ぜんぜん	あまり	小計	そう思う	わりと	いつも	小計
平凡な人生を送りたいと	6.0	10.7	16.7	30.5	29.9	22.9	52.8
目立たないふつうの人生を送りたいと	8.6	21.5	30.1	37.6	20.1	12.2	32.3
つまらない人だと	15.2	34.8	50.0	30.8	10.9	8.3	19.2
友がいなくてさみしいと	26.8	39.2	66.0	19.5	7.2	7.3	14.5

図11によれば、生まれてこなければ良かったと「何度も」「いつも」思う生徒が、上位層の19%から、中位層26%、そして、下位層45%との増加を示している。下位層の生徒にしたところで、生まれつき、「自分なんか生まれなければ良かった」などと思っているわけはあるまい。しかし、成績が不振だと、自分という存在に自信を持てなくなり、成績下位層の生徒が自己否定に近い状況に追い込まれる。

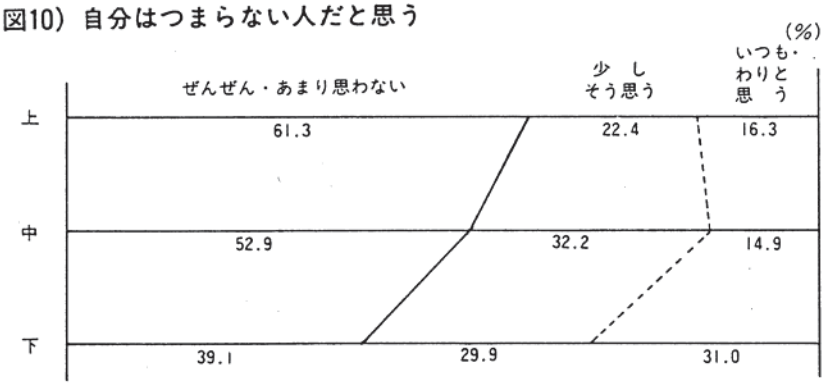
自分の存在に自信を抱けないのであるから、現在、そして、未来について、暗いイメージを持つのが当然であろう。そうした意味で、図11は、本稿のテーマを要約する形で示したグラフとも考えられる。

(表25) 自己評価×成績

(%)

尺度 / 成績 / 自己評価	ぜんぜん・あまりそう思わない					わりと・いつもそう思う				
	上	中の上	中	中の下	下	上	中の上	中	中の下	下
人の役に立つ人だと	29.9	25.6	29.5	29.1	44.0	37.4	29.6	24.9	25.7	23.1
優秀な人だと	50.0	55.5	61.7	66.6	68.6	17.1	11.1	9.5	9.9	10.3
頼りになる人だと	36.5	29.3	35.8	38.4	41.7	29.7	28.1	24.8	24.2	24.6
人の上に立つ人だと	51.8	51.5	56.7	57.9	54.0	23.4	17.3	13.4	13.0	17.5
つまらない人だと	61.3	53.8	52.9	44.1	39.1	16.3	16.3	14.9	23.1	31.0
目立たないふつうの人生を送りたいと	36.3	28.5	28.4	30.6	31.2	30.1	32.5	31.7	32.3	35.3
友がいなくてさみしいと	66.4	66.7	67.1	64.7	63.7	17.8	11.4	13.9	14.9	19.5

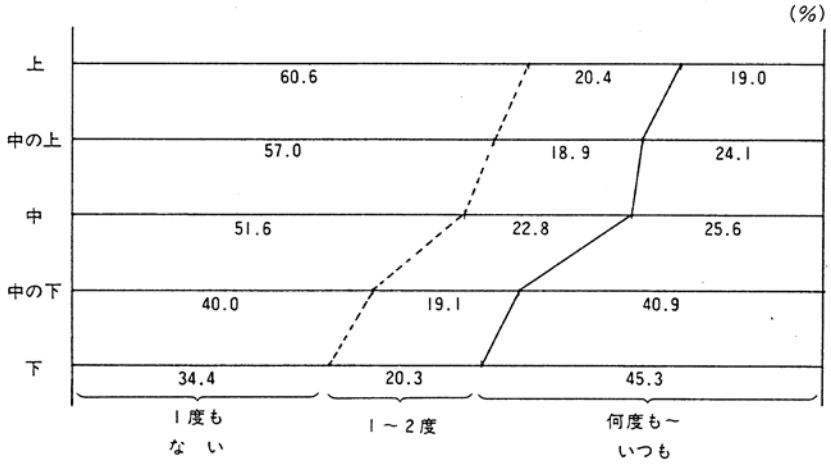
(図10) 自分はつまらない人だと思う



(表26) 自己像の暗さ×成績

(%)

項目	成績＼尺度	1度もない	1～2度	小計	何度も	わりと	いつも	小計
学校へ行きたくない	上	27.9	29.9	57.8	33.4	2.7	6.1	42.2
	中の上	18.7	32.1	50.8	35.6	7.4	6.2	49.2
	中	18.5	31.5	50.0	37.8	8.8	3.4	50.0
	中の下	13.4	29.4	42.8	38.5	12.5	6.2	57.2
	下	11.3	20.7	32.0	36.0	13.3	18.7	68.0
	全体	17.2	29.6	46.8	36.7	9.4	7.1	53.2
生まれてこなければ良かった	上	60.6	20.4	81.0	8.8	4.1	6.1	19.0
	中の上	57.0	18.9	75.9	16.1	4.5	3.5	24.1
	中	51.6	22.8	74.4	16.8	5.1	3.7	25.6
	中の下	40.0	19.1	59.1	20.9	12.0	8.0	40.9
	下	34.4	20.3	54.7	20.3	5.7	19.3	45.3
	全体	48.7	20.5	69.2	17.4	6.4	7.0	30.8

(図11) 生まれてこなければ良かった×成績

→成績が下位になると自己像が暗くなる